ルブリンスキー・スキャンダル-テオドール・レッシングとトーマス・マンの論争をめぐって-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2014-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田島, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16805

明治大学人文科学研究所紀要　第74冊　(2014年3月31日) 143—166

ルブリンスキー・スキャンダル
—テオドール・レッシングとトーマス・マンの論争をめぐって—

田　島　正　行

—— *Abstract* ——

Die Lublinski-Affäre

— Über den Streit zwischen Theodor Lessing und Thomas Mann —

TAJIMA Masayuki

Auf Theodor Lessings unglückliches Leben werfen drei Affären ihre dunklen Schatten: die Lublinski-Affäre, die Harmann-Affäre und die Hindenburg-Affäre. Der jüdische Philosoph Theodor Lessing wurde zwar am Abend des 30. August 1933 von sudetendeutschen Nationalsozialisten niedergeschossen, aber bereits vorher war er durch die letzteren zwei Affären von der deutschen Gesellschft ausgeschlossen worden. Diese zwei Affären, nämlich die Harmann-Affäre und die Hindenburg-Affäre, wurden schon öfters thematisiert. Daher greife ich jene Lublinski-Affäre als meine Thema auf.

Es ist Lessings satirischer Artikel „Samuel zieht die Bilanz" in der „Schaubühne" vom 20. Januar 1910, der diese Affärre verursachte. In diesem Artikel karikierte Lessing den damals berühmten jüdischen Literaturkritiker Samuel Lublinski mit antisemitischen Ausdrücken. Lessings Satire rief heftige Empörung von Schriftstellern und Publizisten in Deutschland hervor. Dreiunddreißig namhafte deutsche Schriftsteller, darunter Theodor Heuss, Stefan Zweig und Ferdinand Avenarius usw., formulierten einen Satz, den sie unterschrieben: „Öffentliche Erklärung: Die Unterzeichneten drücken gelegentlich des Artikels ›Samuel zieht Bilanz‹ von Theodor Lessing in Nummer 3 der ›Schaubühne‹ ihr Bedauern darüber aus, dass es kein Ehrengericht für Journalisten gibt". Der um seine Unterschrift ersuchte Thomas Mann antwortete abschlägig, weil die „Öffentliche Erklärung" ihm zu ungenügend schien. Er schrieb einen eigenen Entgegnungsartikel gegen Lessing.

Thomas Manns Entgegnungsartikel erschien unter dem Titel „Der Doktor Lessing" im „Literarischen Echo" vom 1. März 1910. In diesem Artikel rügte er Lessings Satire scharf und verleumdete Lessings Persönlichkeit, was zu einem heftigen Streit zwischen Lessing und Mann führte. Dieser Streit an sich ist zu unfruchtbar und zu banal, um ihn besonders in Betracht zu ziehen, doch im Lichte der „Judenfrage" ist er sehr interessant und bedeutend.

In dieser Abhandlung möchte ich zeigen, dass der Gegensatz zwischen „Assimilation" und „ Zionismus" oder zwischen „Westjude" und „Ostjude" dem Streit zwischen Thomas Mann und Theodor Lessing zugrunde liegt. Denn Thomas Mann bekennt sich zur „Assimilation" und lobt einen der vorbildlichen „assimilierten Juden" Samuel Lublinski. Dagegen nennt sich Theodor

Lessing „Zionist" und behauptet „das Besondere des Judentums" für „ostjüdische Parias", dessen eigenwillige Auslegung ihn doch von den gewöhnlichen nationalistischen Zionisten unterscheidet. Er sucht nämlich „das Besondere des Judentums" in einer „Heilandrolle" für die Welt. In seinem Aufsatz „Die Unlösbarkeit der Judenfrage" schreibt er folgendermaßen: „Aber Jude sein ist Symbol. Es handelt sich um die Tragödie des Menschen. Jedes Menschen. Der Jude ist nichts als der älteste Mensch. Er hat daher in seinem Blute schon viele Widersprüche aufgelöst und gebunden, welche im jüngeren Blute erst morgen zu Konflikten und Krankheiten führen werden. Er war der Sündenbock. Er schenke nun das Serum, das heilende Blut der Welt."

《特別研究第１種》

ルブリンスキー・スキャンダル
—テオドール・レッシングとトーマス・マンの論争をめぐって—

田　島　正　行

序

1933年8月30日、ドイツのユダヤ人哲学者テオドール・レッシングは、亡命先のマリエンバートで、ナチの刺客により暗殺された（滞在先のホテルで狙撃されたレッシングは重傷を負い、翌日病院で死亡した)。享年61歳であった。当時スイスに亡命中であったトーマス・マンは、この知らせを聞き、「私の古い友人レッシングが殺害された。彼はつねに偽りの殉教者であった」[1]と息子のクラウス・マンに書き送っている。そして日記には次のように書き記した。「こうした最期に私がぞっとするのは、それが最期だからではなく、それがきわめて惨めだからであり、レッシングのような人間にふさわしく、私にはふさわしくないからである」[2]。ナチを批判したヒューマニズムの作家として知られるトーマス・マンが、レッシング暗殺の報に接して、このような酷薄な反応を示しているのはなぜなのか。ナチが亡命先までその命をつけ狙わねばならなかったテオドール・レッシングとは、そもそもいかなる人物であったのか。

テオドール・レッシングは、現在においても一般にほとんど知られていない「忘れられた思想家」である。レッシングの唯一の理解者と言ってよい批評家ハンス・マイヤーは、こう述べている。「この人間の生涯と作品、業績と過誤、追放と暗殺については、すでに今日、明らかになっているなどとは誰も言うことができないでしょう。疑わしい沈黙が彼の経歴を取り巻いています。彼の作品に対する興味を呼び起こすことも、そしてまた思想家レッシングとレッシング事件に関わることになる研究もなされていないのです」[3]。マイヤーのこの発言からすでに半世紀近く経過しているが、事態は本質的にたいして変わっていない。それゆえ、まずレッシングの生涯と作品をごく簡単に紹介しておくことにしよう。

テオドール・レッシングは、1872年ハノーファーで生まれた。父親はユダヤ人の医者であり、母親は富裕なユダヤ人銀行家の娘であった。当地のリツェーウム（古典高等中学校）に通い、ここでルートヴィッヒ・クラーゲスと運命的出会いをする。クラーゲスとの友情は1899年の決裂まで続き、そ

の思想からレッシングは決定的影響を受けている。1894年にクラーゲスの後を追ってミュンヘンに赴き、ゲオルゲ・クライスの同人やシュヴァービング・ボヘミアンの面々と知り合う。1895年にオスカール・パニッツアの戯曲『性愛公会議』が瀆神の廉で告訴されると、レッシングはパニッツア擁護のために『パニッツア事件――〈瀆神〉ならびに陪審裁判所に付された芸術作品に関する批判的考察』を雑誌に発表している。1896年の父親の死と共に医学から心理学と哲学へと専攻を変え、1899年にロシアのユダヤ人哲学者アフリカン・スピルの認識理論で哲学博士の学位を得た。1901年から1904年まで、ハウビンダとラウベガストの田園教育舎（Landerziehungsheim）の教師を務める（この田園教育舎は改革教育学者ヘルマン・リーツが創始したもので、ヴァルター・ベンヤミンも一時期ハウビンダの生徒であった）。この間、ドイツ社会民主党（SPD）に入党し、女性解放運動や労働組合運動に参加している。1907年に『カント倫理学の崩壊』で大学教授資格を得て、翌年からハノーファー工科大学哲学私講師（Privatdozent）になり、中断はあるものの、以後亡命するまでこの職にとどまっている。1908年に「反騒音協会」（Anti-Lärm-Verein）を設立、1910年には「ルブリンスキー・スキャンダル」を引き起こし、トーマス・マンと公的に論争している。第一次大戦中は、平和主義者として野戦病院医師や教師として働いた。大戦中の1915年、著書『ヨーロッパとアジア』が軍の検閲で出版禁止の憂き目にあう（この書は1918年にようやく出版され、1924年の第4版以降は表題が『精神による大地の没落』に改められた）。1918年にハノーファー工科大学に復帰し、翌年に主著『意味なきものへの意味づけとしての歴史』を出版する。1920年に成人教育のための「自由市民大学」（Freie Volkshochschule）を設立。1924年、ハノーファーの大量殺人鬼ハールマンの裁判経過をプラハ日刊新聞の特派員として同紙に報告し、翌1925年に『ハールマン――ある人狼の物語』を出版してハノーファー市民の顰蹙を買う。また、この年、帝国大統領候補者ヒンデンブルクの人物描写記事『ヒンデンブルク』をプラハ日刊新聞に発表する（ヒンデンブルクはハノーファー出身で、ハノーファー工科大学名誉教授であった）。この記事により、レッシングに対する反ユダヤ主義的扇動キャンペーンが巻き起こり、民族主義的・国家主義的な学生、教授、団体、さらに商工会議所や市参事会までもこのキャンペーンに加わり、その輪は翌年にはドイツ全土に広がった。1928年に回想録『ただ一度だけ』を執筆しはじめ（この書は死後1935年に出版された）、1930年には『ユダヤ人の自己憎悪』を出版する。1933年、プラハ経由でマリエンバートに亡命する（途中、プラハでの第18回シオニスト会議に参加）。同年8月30日夕刻、滞在していたマリエンバートのホテルでズデーテンドイツの国家社会主義者たちに狙撃される。8月31日夜、死去。9月2日ユダヤ人墓地に埋葬された。

このようにテオドール・レッシングの主要な事績を抜き書きしてみただけでも、その活動がいかに多岐にわたる旺盛なものであったかがわかる。レッシングは書斎にこもる学究の徒ではなかった。いわゆる「社会参加（アンガージュマン）」の哲学者であって、時代や社会の諸問題に敏感に反応し、社会を挑発しながら警告を発し、誤解され、嘲笑や顰蹙を買いながらも、さまざまな改革を試みたと言えるだろう。その結果、彼は多彩な顔を持つに至った。すなわち、詩人、劇作家および劇評家、教育改革者、女性解放運動家、社会主義者、シオニスト、環境保護者、心理学者、ジャーナリスト、時評家、歴史・文化哲学者などの顔である。これらの間には一見何の脈絡もないように見えるが、そこに通底しているのは、

社会的に抑圧されている者、虐げられている者、排除されている者への全身的共感であり、社会的権力や社会的権威に対する不屈の反抗である。

だが、レッシングの生涯には三つのスキャンダルが暗い影を落としている。「ルブリンスキー・スキャンダル」「ハールマン・スキャンダル」「ヒンデンブルク・スキャンダル」の三つの事件である。レッシングは晩年のほぼ同時期に引き起こした後者の二つによって、暗殺される以前にすでに社会的に抹殺されていたのである。これらのスキャンダルについてはある程度知られ、マイヤーも言及している。それゆえ、本稿ではこれまであまり注目されることのなかった「ルブリンスキー・スキャンダル」を取り上げることにしたい。このスキャンダルは「テオドール・レッシングとトーマス・マンの論争」をその実質的内容としており、従来、トーマス・マン研究者たちによって、トーマス・マンの側からのみ光を当てられることが多かった。私が本稿で試みるのは、このスキャンダルの意味をレッシングの側から探り、レッシングの思想の一端を明らかにすることである。それによってまた、トーマス・マンの知られざる一面も露わになるかもしれない。

I

「ルブリンスキー・スキャンダル」と通例言われているのは、テオドール・レッシングが1910年に発表した『ザムエルが総括する、あるいは小さな預言者―― 一つの風刺(ザティーレ)』（以下、『ザムエルが総括する』と略記）[4] によって引き起こされた文芸上のスキャンダルである。レッシングのこの風刺記事は、当時著名であった文学史家で批評家のザムエル・ルブリンスキー（Samuel Lublinski 1868-1910）の著書『近代の総括』[5] と『近代の結末』[6] を辛辣に皮肉った小文であった。『近代の総括』は、その著者ルブリンスキーによれば「最近20年間の近代ドイツ文学を単に美的に評価し、またその社会的動向を探るのみならず、なかんずく、無意識裡にそれを支配している根本法則に還元し、これを尺度に測定し、批評しようとする」[7] ものであって、いわゆる「文学社会学」の先駆をなす評論とされている[8]。このなかで、ルブリンスキーはいまだ評価の定まっていなかった『ブッデンブローク家の人々』の価値をいち早く認め、著者のトーマス・マンに最大限の賛辞を贈ったのである[9]。トーマス・マンはそのことをけっして忘れることはなかった。それゆえ、レッシングのルブリンスキーに対する風刺記事が発表されるや、トーマス・マンはレッシングを駁する『レッシング博士』を発表し、両者の間で、いわば代理戦争の形で、論争が起こったわけである。

さて、この論争の内容を検討する前に、資料によって明らかになっている論争の経緯をまとめておこう。

1910年1月20日、『シャウビューネ』誌にテオドール・レッシングは『ザムエルが総括する』を発表した[10]。この風刺記事には、ユダヤ人批評家ルブリンスキーの人格を貶め、彼の素性を揶揄する反ユダヤ主義的言辞が多数散見されるうえに、作者のレッシング自身がユダヤ人であったため、大変なスキャンダルとなった。33人の高名な作家たちは、レッシングの風刺記事に対して、「ジャーナリストに対する懲戒裁判がないことは遺憾である」[11] 旨の抗議声明に署名したうえ、この声明をいく

つかのドイツ文芸誌に公表した。署名者のなかには、詩人のフェルディナンド・アヴェナリウス、後のドイツ連邦共和国初代大統領のテオドール・ホイス、作家のシュテファン・ツヴァイクも含まれていた。もちろんトーマス・マンも署名の依頼を受けたが、彼はそれを断る。その理由として、こうした形での抗議では不十分であり、自分は「ささやかな反論」を書くつもりだと、2月3日に返答している[12]。2月8日、トーマス・マンのごく近縁の女性親族から、ユダヤ人女性として著しく傷つけられたがゆえに、今後一切の関係を解消し、「反騒音協会」から脱退する旨の手紙がレッシングに届けられる[13]（レッシング支援者のこの女性はヘートヴィッヒ・ドームであると推測されている[14]。彼女は、トーマス・マン夫人カーチャ・マンの祖母であった）。2月10日、レッシングはトーマス・マンに、「あなたの女性親族の、私には理解できない措置をあなたも是とするのかどうか」[15]問い合わせる。これに対してトーマス・マンは、2月12日、レッシングの風刺文に対する自分の怒りは件の女性親族よりもはるかに大きく、レッシングが風刺文の公的撤回を『シャウビューネ』誌上で表明しなければ、厳しい反論を発表すると返答した。トーマス・マンのこの提案をレッシングは峻拒し、「高潔な論争を大いに楽しみにしている」[16]と書き送り、ここにトーマス・マンとレッシングとの論争の火ぶたが切って落とされた。

1910年3月1日、トーマス・マンは『文学エコー』誌に『レッシング博士』と題したレッシング攻撃の小論を発表する[17]。これは、『ザムエルが総括する』を厳しく叱責し、レッシングの業績や活動を嘲笑してその人格を侮蔑するものであった。憤激したレッシングは、トーマス・マンにこう打電して、決闘を申し込む。「今後のことについて、私は私の家族の名のもとに、あなたが自分の確信を武器でもって擁護する気があるかどうか問わなくてはならない」[18]。トーマス・マンは、「あなたの電報は一切の慣習に反しており、私には理解しがたい」[19]と返電する。3月10日、レッシングは『シャウビューネ』誌に『トーマス・マンに抗して』を発表する[20]。このなかでレッシングはこれまでの経緯を自分の側から振り返り、自己弁護に努めている。これに対して、トーマス・マンはレッシングが都合よく事実関係を編纂・歪曲しているとして『訂正』を4月1日、『文学エコー』誌に載せた[21]。この『訂正』に対する訂正としてレッシングは『トーマス・マンの〈返答〉に対する訂正』を書くが、『文学エコー』誌に掲載を拒否される[22]。

1910年3月24日、ルブリンスキーの『レッシング博士に対する要求』が『ブラウブーフ』（„Blaubuch“）誌に掲載された。このなかで、ルブリンスキーは「これまでまったく未知であった著述家の文学的人格について判断を下したことを申し訳なく思う旨を『シャウビューネ』誌上で公表すること」[23]を求めている。これに応えて、4月14日、レッシングは『S・ルブリンスキー――ローマへの返答』を『ブラウブーフ』誌に発表し、次のように述べている。「私は彼を〈判断〉しなかった。私は、滑稽に見えた体験を、見えるままに描いたのだ。私が文学的印象から形作った像に、実際のルブリンスキー氏が似ているかどうかは、実際のソクラテスが、アリストファネスの人物描写に見られるソクラテスのように美しかったのか、もしくは美しくなかったのかという難問に帰着するのである」[24]。

最終的に、1910年5月1日、レッシングは著書『ザムエルが総括する、そしてトミーがモラル牛の

乳を搾る、もしくは二人の王の転落――風刺を書くドイツ人への一つの戒め』を私家版として出版する[25]。この書には、レッシングの問題の風刺文やトーマス・マンの『レッシング博士』、および両者が雑誌に発表した文書、さらに著作家たちの抗議声明や「ルブリンスキー・スキャンダル」をめぐるジャーナリズムの反応、そしてレッシングのトーマス・マン小論『トミーがモラル牛の乳を搾る――一つの詩人-心理学』が収められており、「テオドール・レッシングとトーマス・マンの論争」の全貌が把握できるようになっている。ところで、トーマス・マンの義父アルフレート・プリングスハイムはこの出版に激怒し、直ちに出版物を回収し廃棄しなければ、告訴するとレッシングを脅した。この恫喝にレッシングは屈するが、それは著作権侵害の恐れがあったからである。レッシングはトーマス・マンとルブリンスキーの了承を得ずに、両人の文書を件の著書に収録していたのである。しかし63部はすでに売却済みであり、回収不能であった[26]。付言しておけば、アルフレート・プリングスハイムは定職の無かったレッシングをハノーファー工科大学私講師に推薦してくれた恩人である。このこともまたレッシングの屈服に影響を与えていたのかもしれない。

以上で、「テオドール・レッシングとトーマス・マンの論争」は一応の決着を見るのであるが、しかしこれには余談がある。1910年12月26日、ザムエル・ルブリンスキーは脳卒中で急逝する。享年42歳であった。レッシングは、批判を込めた感動的追悼文『ザムエル・ルブリンスキー追悼』を発表した[27]。それを読んだトーマス・マンは、兄のハインリッヒ・マンにこう書き送っている。「レッシングは、吐き気を催させる慈悲深い虚偽の追悼文を『シャウビューネ』誌に公表した」[28]。

Ⅱ

さて、論争の発端となった問題の記事『ザムエルが総括する』を見てみることにしよう。これは、10年前、はるばるベルリンから訪ねてきたルブリンスキーを案内して、ミュンヘン市内各所を歩き回った経験をレッシングが回想するという体裁の風刺文である。ミュンヘン時代の若い頃に、ルブリンスキーが一度訪ねてきたことがあったとレッシング自身述べているが、おそらくこのときの体験を戯画化したものであろう。この風刺文が人々を激怒させたのは、ルブリンスキーの批評家としての姿勢が皮肉られているばかりでなく、彼のユダヤ人としての特徴が嘲弄されているからである。注目すべきいくつかの場面を挙げてみよう。まず、ジーモン博士宅でレッシングが超越的分析論に関する講演をしているところにルブリンスキーが闖入する冒頭の場面である。

> 突然、扉が開いた。そして、失礼しますと身振りで表しながら、小柄な説教屋が部屋に転がり込んだ。かなり短いせかせかした両足の上に一つのずんぐりした小さなシナゴーグ。彼の太鼓腹はアプシス（この中に契約の櫃が保管されている）のように、外界にひどく張り出していた。彼が誇らしげに振舞い、彼の小さな池を泳ぎ回るときには、彼の太鼓腹はヒキガエルのように膨らむのだ。しかしそのぶよぶよの太鼓腹には、短く接いだように、小賢しいまん丸い両目の付いた黒くて丸い小頭が座っていた。この両目は眼鏡越しに、疑いもなく、何も見ず、何

も察知しなかった。そしてこの小男がやって来るのを見た人は、たちどころにわかったのだ、ああ、なんてことだ、この男は見ないし、この男は聞かないし、この男は味わわないし、この男は嗅がないのだということを。この男は生涯を通して語り、書き散らしているのだ！　しかしこの小男はまったく無邪気にユダヤ訛りでしゃべりながら部屋に入り、言葉の虫けらを左右にまき散らして尋ねた。レッシング博士はここにおられますでしょうか。大変申し訳ありません。何卒、お許しください。至急、レッシング博士にお会いしたいのです。どちら様がレッシング博士でしょうか。彼はシュヴァービングから駆けつけてきたところなのだ。

座って、少しお聞きにならないのですか。はい、聞いてはいられないのです。私はごく最近ミュンヘンに来たばかりです。ミュンヘンは都市として全体に好感がもてます。ベルリンとはまったく違います。もしかするとこの問題について書くことになるでしょう。午前中は旧絵画館（アルテ・ピナコテーク）に行きました。これからすぐに新絵画館（ノイエ・ピナコテーク）に行くつもりです。しかし晩になって暗くなれば、もはや芸術作品を見ることはできません。そのときに、あなたのために喜んで貴重な時間を割くつもりです。ことによると、そのときに、私たちは少しばかり魂の交歓ができるかもしれません。

わかりました、と私は言った、今晩9時にカフェー・ルイトポルトで。左手の大きなヴェネチアン鏡の下の赤い肘掛椅子で。するとその小さな生き物はふたたび後ろに下がり、膝をかがめてお辞儀をし、改めて別れの小さな説教をして、短い足をばたつかせてユダヤ訛りでしゃべった。彼の太鼓腹を大きく張り出しながら。それによって、威厳を際立たせ、そして偉大な文学者の誇りを、もしくは死すべき者たちのもとでの預言者の悲劇的高さを際立たせるように。扉が彼の背後で閉まった[29]。

ここで、ルブリンスキーの小太りの姿がユダヤ人の会堂のシナゴーグに、その膨らんだ腹はアプシスに擬せられている（アプシスとは教会の後方に付属する半円形の張り出し部分のことである）。しかもこの太鼓腹はまたヒキガエルの腹に擬せられているのである。そればかりではない。場をわきまえず、「ユダヤ訛りでしゃべりながら」自分の用件を臆面もなく伝えるルブリンスキーの姿は、反ユダヤ主義的パンフレットによく見られる「あつかましいユダヤ人」のカリカチュアそのものである。ここで「ユダヤ訛りでしゃべる」と訳した原語は〈mauscheln〉というドイツ語で、もともとは「イディッシュ訛りで話す」という意味であり、そこから「ユダヤ人のやり方で汚い商売をする」という侮蔑的意味に発展した反ユダヤ的差別用語なのだ。この差別用語が平然と二度までも使用されている。この場面を読んだドイツ人は、ユダヤ系ならずとも、眉をひそめるに違いない。

次は、約束の時間にカフェー・ルイトポルトで落ち合い、少しばかり「魂の交歓」をする場面である。

彼は私を新絵画館についての会話に巻き込んだ。彼の言うところによれば、午後に見たこの新絵画館は、彼の魂に圧倒的な消しがたい印象を与えたとのことだった。しかし、ここで、私

がエスプリユダヤ人タイプと呼ぶ、あの物書きタイプとの長期の経験から、あらかじめこう言い添えておかなくてはならない。この小柄なザムエルはこれまで生きてきたなかでいまだ一枚の絵画も見たことがなく、一つの楽曲を聞いたこともなく、一本の生花の香りも嗅いだことがないのだ、と。なるほど彼の敏捷な小さい足が世界中のギャラリーをヨタヨタ歩き回るのが見られる。しかしあの春の午後、小柄なルブリンスキーは名前と絵の説明文の記されたプレートだけを見て、記憶にとどめたのではあるまいか。つまり、彼は描かれた絵画の数々を、彼が個人的に読んだ美術館カタログの証拠物件として鑑賞したのである。絵から見て取るのはその下の名前が合っているかどうかであり、そしてふたたびこの名前をムーターの新美術史で調べるのだ[30]。

レッシングが「エスプリユダヤ人」と呼んでいるのは、博覧強記のいわゆる「ユダヤ系知識人」にほかならない。彼らは夥しい書物を読み、恐ろしいほど知識を貯め込み、何でも知っているがゆえに、何についても「判断」を下す。そして数多くの書物を書く。ただ一つ彼らに欠けているのは「生の体験」である。すなわち、彼らは「生」を味わい、楽しむ術を知らないのだ。芸術作品の鑑賞も、彼らにとっては芸術作品を論評するための材料にすぎない。こうした「エスプリユダヤ人」の代表格がルブリンスキーなのである。「彼にとって世間のすべての人は物を書く人と物を書かない人とに分裂していた」[31]のであり、「(彼は) あらゆる人に関して、まさに自分の持っている本を読んで得られる程度のことを知っていた」[32]のである。

最後は、ルブリンスキーが「民衆の生活をいくらか経験したい」[33]と言うので彼を有名なホーフブロイハウスへと案内する場面である。その途上でも、ルブリンスキーは「自分のオシッコをひっかけることのできる文学的場所を子犬のように私の先を歩いて嗅ぎまわった」[34]。「ごらんなさい、ルブリンスキーさん、あそこのカフェーの窓を。あの後ろでイプセンは毎日午後になるとコーヒーを飲んでいたのです、と私は言った。すぐさま彼は文学的短足を上げ、ふたたびオシッコをひっかけた。〈イプセン〉と彼は叫んだ」[35]。そしてホーフブロイハウスに到着すると、次のような場面が繰り広げられる。

ミュンヘンのホーフブロイハウスに小柄なザムエルはいた。彼はもちろんホーフブロイとアウグスティーナーブロイをほとんど区別することはできなかったが、それはたとえばハ長調のシンフォニーとホ短調のソナタを、あるいは（彼がたまたま名前の書かれた小プレートの文字を眼鏡越しに取り違えてしまった場合）モネの絵とマネの絵を区別することができないようなものなのだ。小柄なザムエルはビールをまったく飲めないのでなおのこと、すぐさま生に酔いしれて興奮した。彼が小さな椅子に座り、給仕の娘がミュンヘン風大根サラダで彼を刺激するやいなや、はじめて彼はグラスの代わりに正味１リットルジョッキで一気にビールを飲み干し、たちどころに熱くなった。しかし主の香油を塗布された者は熱くなると――おお、〈神よ（モンディウ）、神（モン）よ（ディウ）！〉――すぐさま知恵の香油が滴りはじめるのだ。ダメだ、私はもうこれ以上耐えられなかっ

た。この男は1分ごとにくつろいで文学的になっていった。彼の人生全体はそもそも本で読んだ言語像(ヴォルトビルダー)からのみ成立しているのだと私は思う。彼はホーフブロイにいれば、たとえばドイツ文学におけるホーフブロイの役割を、もしくはかつて有名な他の詩人たちがホーフブロイにいたことを、考えるのである。彼と宏大な人生との間には最新文学年鑑があるのだ。ダメだ、私はもうこれ以上耐えられなかった。まさに彼はふたたび質問を浴びせかけてきた。あなたはゾラをどう思います。『イェルン・ウール』はもう読みましたか。『ブッデンブローク家の人々』を評価しますか。リルケをどう思います。リヒアルト・シャウカールを知っていますか。[36)]

結局、レッシングは耐えきれなくなって、妻子が家で待っていることを口実に、ルブリンスキーに別れを告げる。その後ルブリンスキーと二度と会うことはなかったが、5年前にドレスデン近郊の森の小道で、真夜中、偶然にもルブリンスキーを見かける。

私が驚いて見上げると、私のすぐそばに、三人の遅ればせの夜の散歩者がいた。金色の鼻眼鏡をかけたユダヤ人の若者が、歩き回る年かさの小さなシナゴーグをムーア人よろしく敬虔に見下ろしている。ルブリンスキーだ、私は驚いてつぶやく。そして私の血は凍る。背の高いユダヤ人の若者の尋ねる声が聞こえる。あなたはシュテファン・ゲオルゲに対してどうお考えですか。すると小さなタルムードがこう答えるのが聞こえてくる。形式的な点では近代の発展であることは喜んで認めたいと思います——しかし他方、美的方向の一面的過大評価に対しては注意するようにと真面目に警告せざるをえませんね。(中略) とんでもない！　私は驚いて叫ぶ、奴だ！　まぎれもない！　ルブリンスキーだ、彼は星空の下、夜の森を歩き回って、総括している。そして私は走りに走った、三人のそばを走り抜けた、私がエスプリユダヤ人タイプと名づけるこの物書きタイプは、幸いにも、見ず、聞かず、味わわず、嗅がず、察知せず、ひたすら語り、書くだけの存在であることを信じて[37)]。

この風刺文のエピローグは次のようなものである。レッシングが「シュムッデルモップ書店」(die Schmuddelmopsche Buchhandlung は直訳すると「不潔なモップ書店」の意味) でザムエル・ルブリンスキーの書いた分厚い二冊の本『近代の総括』と『近代の結末』をたまたま目にし、数頁を拾い読みする。その後、夜に、レッシングは恐ろしい悪夢に襲われる。昼に目にしたルブリンスキーの本の頁から小さなシナゴーグのようなルブリンスキーが現れ、そのアプシス (太鼓腹) が分離し、そこからまた小ルブリンスキーが次々に生まれてくる。こうして誕生した何千もの小ルブリンスキーは手にしたペンでチクチクとレッシングの心臓を突き刺し、そこでレッシングが目覚めるのである。最後は、レッシングの次のような嘆息で終わっている。「人類はその偶然な神々や理念のすべてと共に没せざるをえない。しかし宇宙の廃墟の上に、ピンネ出身の小さなザムエル・ルブリンスキーは座っている。彼はその小さな腹を誇らしく宇宙空間に突き出して、総括している」[38)]。

Ⅲ

ところで、ユダヤ人差別の歴史をもたない我々のような人間が、今日、何らの予備知識もなく、このレッシングの風刺記事『ザムエルが総括する』を読んだならば、はたしてどのような印象を受けるだろうか。ルブリンスキーが実在の人物であったことも知らずに、辛辣な「知識人」批判のカリカチュアとして結構面白がるかもしれない。しかし、1910年当時のヴィルヘルム二世の帝政ドイツにおいて、このような風刺記事を発表すれば、猛烈な反発を受けることは十分予想がつく。先に見たように、ここには、ユダヤ人を侮蔑し、嘲笑する反ユダヤ主義的表現が随所に見られるからである。ましてや、権威あるユダヤ人批評家ザムエル・ルブリンスキーが実名で風刺されているのである。現代であれば、さしずめ「名誉毀損罪」で訴えられてしまうに違いない。33名の高名な作家たちが抗議声明を公表したと先に書いたが、それも当然だろう。ジャーナリズムも一斉に反発した。たとえば、ある記者は「レッシンングの論文は面白く思われるかもしれないが、しかし下劣な非難すべきカリカチュアだ」[39)]と書いている。また、『彼をボイコットしろ！』という見出しの下に、「その高潔な面目を失いたくない雑誌や日刊新聞は、今後、レッシングだけには扉を閉ざさなくてはならない」[40)]という記事もある。それどころか、『絞殺？！それとも銃殺？！』という見出しで、「絞首による文学的死がレッシングにとってきわめてふさわしい最期であることを誰も否認しないだろう」[41)]という物騒な記事さえある。こうしたなかで最も手厳しくレッシングを批判したのが、トーマス・マンであった。

トーマス・マンの『レッシング博士』は、この冷静沈着な作家にはめずらしく、常軌を逸した激しい誹謗文書である。トーマス・マンの伝記作者ペーター・ド・メンデルスゾーンはこう述べている。「『ビルゼと私』におけるポレミックな章句もレッシング報復の鞭打ちに比べれば悲しい子守唄だった。その際に、トーマス・マンが自分のなかから〈取り出した〉ものは、実際、驚くべきものだった」[42)]。トーマス・マンははじめのうちこそ冷静な筆致でレッシングを叱責しているものの、途中からは自制心を失い、自身の内密な感情を思わず吐露している。その意味では、『レッシング博士』はわずか数頁の小文ながら、貴重な資料と言えるかもしれない。

トーマス・マンはまずレッシングの風刺記事『ザムエルが総括する』を「形式的な点ではハイネの模倣の拙劣な試み」[43)]であるとし、「彼の才能の無さを遺憾ながら無視しても、彼の厚顔無恥は第三者にも公然たる反論を呼び起こす」[44)]と前置きする。そのうえで、ルブリンスキーの『近代の総括』と『近代の結末』を書店で瞥見したと言うレッシングの言質を捉えて、こう裁断する。「文学の価値と尊厳を自らの――もちろん尊敬できない――人格に従って判断し、それゆえ文学者という尊称が罵言となった、あの今日広く見られる種類の文学者に彼は属している」[45)]。「しかしレッシング氏には事実認識が欠けている。それゆえ、彼が自らの心的透視能力を理解しがたいほど過大に評価するよう自分や我々を説得しようとしているだけに、なおのこと、十年間に二三回しか会っていない人間ルブリンスキーに対する認識はますます欠けてしまう。したがって、彼の記事は始めから終りまでルブリンスキーの市民としての人格に対する嘲弄、――考えられないほど粗野で愚かしい一つの中傷的

歪曲像である」[46] としている。トーマス・マンによれば、レッシングの風刺記事に見られるルブリンスキー像は悪意に満ちた恣意的歪曲であって、何ら客観的事実に基づくものではない。そもそもレッシングはルブリンスキーに十年間に二三回しか会っていないし、その著書も本屋で拾い読みしたにすぎない。こうしたわずかな情報を基に、権威ある評論家ルブリンスキーの「市民としての人格」を不当に憶測し、揶揄嘲笑している。これこそまさに文学に対する冒瀆であり、プライバシーの侵害であると言うのである。

これに対して、レッシングは次のように答えている。「あらゆるカリカチュアと同様、風刺は一面的である。しかし私の風刺の真理は、あなたや他の誰かがそれを信じているかどうかによるのではなく、私がそれを信じているかどうかによるのである」[47]。そしてこう続けている。「思想家、つまり批評家にとって、現実の出来事は本当とは思えぬことの連鎖である。偶然的な歴史の偽りを意味に満ちた彼の世界へと――偽って転換することにより、彼ははじめて現実的なるものを真理に変える。彼は、叙事詩人のように、ありのままの人間を見せる鏡を持っているのではない。彼が持っているのは凹面鏡であり、それはカリカチュアしながら人間の〈本質的なるもの〉すべてを開示するのである」[48]。なるほどレッシングは自分の風刺が主観による一面的歪曲であることを認めている。しかし風刺の主観的歪曲を通じて「人間の〈本質的なるもの〉」が明るみに出てくるのであり、それが「風刺の真理」だと言う。すなわち、レッシングの心眼には、現実のルブリンスキーの形姿を透かしてその原像としての「エスプリユダヤ人タイプ」＝「物書きタイプ」の姿が浮かび上がってきたのであり、これがまさにルブリンスキーの本質であった。したがってレッシングとしては、「エスプリユダヤ人タイプ」の人間一般の態度を批判するために、その典型であるルブリンスキーをカリカチュアしたというわけである。

問題はルブリンスキーが実在のユダヤ人であり、しかも実名で風刺されていることであった。レッシングはこう答えている。「政治的風刺新聞で毎日行われていることを私は行った。すなわち、私が人間的に尊敬している世間周知の人に関して、粗削りな黒白ペン画技法の野卑なシルエットによる露骨な滑稽さで、ひどくたわいのないカリカチュアを描いたのだ。こうした風刺が述べているのは、この著者はよくないとか、この人間は好ましくないということではなく、この著者は滑稽だということなのだ」[49]。権力を持つ政治家についての風刺画や風刺文が実名で新聞や雑誌に掲載されている。それと同じように、自分は権威ある批評家ルブリンスキーを実名で風刺した。なぜなら、ルブリンスキーは「最後の審判のエホバ」のごとく、近代ドイツ文学を総括し、その未来を予言しており、その姿が自分には滑稽に思えたからだと言う。そして実在の人間の戯画化に関して、レッシングはトーマス・マンに次のように反駁している。「トム、あなたもかつて良き友人たちを中傷し、立派な家の出の叔父上と叔母上はあなたの美しい家族小説のなかで汚されてファルスとされている」[50] ではないか、と。ここでレッシングが指摘しているのはトーマス・マンの叔父フリードリッヒ・マンのことである。トーマス・マンの伝記作者クラウス・ハープレヒトはこう記している。「叔父のフリードリッヒ・マンは、小説のなかで、とろくてどこか憎めない〈叔父クリスティアン〉として扱われることになるが、その描き方に10年経ってもまだ腹を立てていた。そこでこの叔父は、新聞『リューベック一

般報知』に投書して、甥がやってのけたカリカチュアについて声を大にして文句をつけたものである」[51]。そして「プライバシーを守る気持ちや他人を思いやる気持ちは、マン一族の徳の伝統にはなかったらしいと」[52]と結論している。とはいえ、トーマス・マンの場合、たとえそのモデルがすぐさま特定できるにせよ、あくまで匿名で自分の叔父を戯画化しているのである。他方、レッシングは実名でルブリンスキーを風刺した。これは決定的な違いと言わねばならない。しかしレッシングはなぜ実名でルブリンスキーを風刺したのか。この問題は最後に考えることにしたい。

Ⅳ

トーマス・マンの『レッシング博士』はその半ばで、風刺記事『ザムエルは総括する』からその作者自身へと批判の対象を変える。つまりレッシングへの個人攻撃となるのである。それと共にトーマス・マンの筆致は自制心を失い、信じがたい反ユダヤ主義的言辞の数々が噴出してくる。

トーマス・マンは次のように書いている。

> ルブリンスキー氏は決して美しい男ではない。そして彼はユダヤ人である。しかし私はレッシング氏も知っている（彼と知り合うことに誰が責任を持てようか！）。そして次のことぐらいだけは言っておく。彼のなかにゲルマン神話の光の妖精（リヒトアルベン）ないしアーリア人の男らしさの原像を見ると言い立てる人は、その熱狂から覚めなくてはならない。（中略）彼に対してすら武器として用いたくはない屈辱的人生経験、これが、身体的魅力の欠如に関して、彼を愛他主義的な気持ちにさせたという。彼がかつて他のシュヴァービングの熱狂者たちの男女と共に真っ裸で火のまわりを踊り回っていたというぞっとする逸話を、私は自らの健康を危うくすることなしには思い出すことができない。他人を批判すると自分も傷つくことがあると諺は教えている。劣等ユダヤ人種の恐るべき実例として身を屈めながら人生を凌いでゆく者が、二言目には「mauscheln（ユダヤ訛りでしゃべる）」という言葉を持ち出す風刺文書（パスクヴィル）によって報酬をもらうならば、彼は無知以上のものを示している、つまり汚らしい自己侮蔑を示しているのだ。無法となった地方文芸欄のスタイルで「エスプリユダヤ人」タイプを風刺すること、それは、いくつかの場合にはやはり讃嘆すべきものである、このタイプの最も脆弱で最も卑しい見本（サンプル）以外何も全世界に提示できない者に、申し分なく適っている！　彼は医者として、教師として破産し、また抒情詩人、劇作家として破産し、彼によって執拗に勧められたあの「哲学的作品」のなかでその虚弱な無能力を示したあとで、我らが英雄はゲッティンゲンでは劇評家見習いとして、ミュンヘンではシオニスト、そして女性会議のための司会者として腕を試した。さらに、誰もができる程度に、舞台装置改革を行った。最近では、役立たずの老いぼれの彼は、ハノーファー工科大学の私講師に甘んじ、当地で、大方の失笑を買っている反騒音協会の機関誌『静けさに対する権利』ないし『反-無法者』を出版している。――これは、レッシング氏の貴重な神経組織が大いに問題とされることがよもやなければ、同情して彼の好きにさせる当座業務の一つで

ある[53]。

いかにもトーマス・マンらしい回りくどく意地悪な文章であるが、しかしこれが意味しているところを理解できるのは、一部の人々を除けば、論争の当人たちだけではあるまいか。当時のドイツの読者たちも訳がわからなかったに違いない。というのも、トーマス・マンはここで、レッシングにしかわからないような形でその私生活を暗示的に揶揄しているからである。たとえば、「彼に対してすら武器として用いたくはない屈辱的人生経験、これが、身体的魅力の欠如に関して、彼を愛他主義的な気持ちにさせたという」が、この文章が何を意味しているのか、理解できる人はほとんどいないだろう。トーマス・マンの伝記作家ヘルマン・クルツケによれば、これは「ブルーノ・フランク-スキャンダル」の当てこすりであるという[54]。レッシングは1900年にマリーア・シュタッハと結婚し、二人の娘を授かった。しかし1904年妻のマリーアはレッシングの教え子ブルーノ・フランクと共に出奔した（作家となったブルーノ・フランクは後年、トーマス・マンと親交を結んだ）。あとに残されたレッシングは二人の幼子を苦労しながら男手ひとつで育て上げる一方、女性解放運動に積極的に参加してゆく。「コキュー」としてのこの「屈辱的人生経験」により、ユダヤ人である自分の「身体的魅力の欠如」を自覚したレッシングは、そのルサンチマン意識を克服すべく、「愛他主義的な気持ち」になり、女性解放運動にのめり込んでいった、ということがトーマス・マンの発言の言外に含まれているのである。しかも「劣等ユダヤ人種」の「最も脆弱で最も卑しい見本」としてレッシングの生の閲歴の数々を挙げたうえで、彼を「役立たずの老いぼれ」と断じる。トーマス・マンによれば、レッシングのルブリンスキーに対する風刺の根底には、社会的成功者に対する「卑劣なルサンチマン」[55]意識があるとされる。トーマス・マンは見下すように、こう教え諭している。「時代に対する闘争、そして時代が凱歌を挙げながら誉めそやすものに対する闘争は、必ずしも個人的憤懣から生じるとは限らない。闘争が自己認識、自己克服への意志から生まれ、そして時代の自己認識や時代の自己克服を促進するということを、偉大な実例が教えている」[56]。

テオドール・レッシングとトーマス・マンとの論争は、相互の私生活の暴露的中傷と不毛な言葉の応酬に終始し、とても不惑に近い大人の論争とは思えない、辟易させる文学スキャンダルである。その意味では、この論争はことさらに取り上げる価値はない。だが、「ユダヤ人問題」に対するレッシングとトーマス・マンとの見解の相違という観点から見るとき、それはきわめて興味深いものとなるだろう。

ところで、レッシングの風刺記事に対して、トーマス・マンがこれほどまでに激怒したのはなぜなのか。トーマス・マン自身、「私がルブリンスキーの弁護をするのは、彼が私を誉めたからではなく、得心がゆくように私を誉めたからである」[57]と述べている。そして夫人のカーチャ・マンは、「夫は恩を忘れない性質だった。何か親切なことをされると、それを忘れなかった」[58]と言っている。しかしこうした表向きの理由だけで、あの異様なまでの反応を説明することはできない。トーマス・マン研究者の多くはこの問題に口を閉ざしているが、唯一の例外が先のヘルマン・クルツケである。彼はこう推測している。「トーマス・マンは成功を収めて以来、オットー・グラウトフのように、初

期の親しい者たちを見捨てる。レッシングもまた、知りすぎていた者たちの一人であったのかもしれない。マンはこうした者たちに対して距離をとらねばならなかった。なぜなら、彼らは彼が苦労して打ち立てたファッサードにとって危険な存在となる恐れがあったからだ。これは一つの推測にすぎない」[59]。しかし私は違った推測をする。すなわち、レッシングに対するトーマス・マンの激烈な叱責の背後には「ユダヤ人問題」があったのではないかということである。

トーマス・マンの問題作『ヴェルズンゲンの血』(1905年)がプリングスハイム家をモデルにした一種の風刺文学であったことはよく知られている。「トーマスは、カーチャ・プリングスハイム嬢への求婚以来自分が直面して知った異質な環境世界を短編にしたのである」[60]。この「異質な環境世界」とはユダヤ系成金ブルジョアであるプリングスハイム家の豪奢な生活であり、トーマス・マンはそれを風刺して短編に仕上げた。それは、「意地悪なコミカルさと、刺々しい辛辣さをふんだんにもった冷たいあからさまな風刺であり、綿密で冷酷、暴露的で嘲笑的、人を傷つけるようなものをもっていた」[61]。問題は、プリングスハイムの双子の兄妹クラウスとカーチャの関係がヴァグナーの『ヴァルキューレ』に因んで近親相姦的関係として風刺されていることであった。「ミュンヘンの人びとは、トーマスが〈ユダヤ人双生児の原罪〉という物語を書いて婚約期間中にフィアンセの両親の家で受けた〈屈辱〉に仕返しをしようとしたのだ、とひそひそ囁き合った」[62]という。義父アルフレート・プリングスハイムとの話し合いの結果、トーマス・マンはこの短編の印刷差し止めに応じた。こうした苦い経験がレッシングの反ユダヤ主義的風刺記事に対するトーマス・マンの異常な反発に投影されているのではないか。つまり、かつて自分が反ユダヤ主義的作品によってプリングスハイム家の人々を傷つけたことに対する贖罪意識が、レッシングへの激しい反駁となって表れているのではないかということである。

先に引用したトーマス・マンの文章を子細に見てみれば、ユダヤ人が暗に「優等ユダヤ人」と「劣等ユダヤ人」の二種類に識別されていることに気づくであろう。この「優等ユダヤ人」がいわゆる「同化ユダヤ人」であり、「劣等ユダヤ人」が「東方ユダヤ人」を指していることは明白である。それは、『ユダヤ人問題の解決』(1907年)におけるトーマス・マンの発言を読めばわかる。

> ユダヤ人問題の解決ないし促進のためになされた既存の諸提案のどれに最も共鳴するかと問われるならば、私は〈同化(アスィミラツィオーン)〉を支持するでしょう——たとえ通常とは違う、より一般的な意味においてであれ。すなわち、ユダヤ民族の国民化(さまざまな諸国民への吸収)よりも、まずユダヤ民族のヨーロッパ化が重要であると私は考えます——それは、明らかに堕落し、ゲットーのなかできわめて窮乏化しているこの人種を貴族化すること、つまり典型的ユダヤ人をふたたび引き上げて高貴化することと同じ意味です。これは、良きヨーロッパ人に反発を覚えさせるもの一切を典型的ユダヤ人から取り去ることになるでしょうし、これこそ、何よりもまず希求されねばならないことなのです[63]。

そして「同化」を推し進めるために、トーマス・マンは「良きヨーロッパ人」と「ヨーロッパ化し

たユダヤ人」との「混血婚」を奨励している。

> (略) そして経済的に特権を与えられたユダヤ人のなかには、今日すでに次のような若い人たちが存在しています。すなわち、イギリス流のスポーツを楽しみながら、まったく恵まれた諸条件の下で成長し、自らの性質を否定することなしに、一定程度の育ちの良さ、洗練、魅力、身体文化を具現し、ゲルマン人の娘や若者に〈混血婚〉の考えも悪くはないと思わせるに違いない若者たちです。混血婚の増加は、実際、典型的ユダヤ人の向上とヨーロッパ化にかかっているでしょう。そして洗礼に関して言えば、その実際的重要性をどうやら過小評価してはならないようです[64]。

周知のように、プリングスハイム家は「ヨーロッパ化」されて「貴族化」した「同化ユダヤ人」の名家である。カーチャの祖父ルドルフ・プリングスハイムはシレジア出身の「東方ユダヤ人」であり、炭坑や鉄道などによって一代で巨万の富を築いた成金ブルジョアであった。その莫大な富を相続したカーチャの父アルフレート・プリングスハイムはミュンヘン大学教授の数学者であったが、バイエルンの州都で豪奢な洗練された貴族的生活を謳歌していたのである。その子供たちはまさに「一定程度の育ちの良さ、洗練、魅力、身体文化を具現し、ゲルマン人の娘や若者に〈混血婚〉の考えも悪くはないと思わせるに違いない若者たち」であり、カーチャはその一人であった。したがって、「ユダヤ問題の解決」としてトーマス・マンの提唱する「同化」、そしてそれを推進するための「混血婚」の奨励とは、何のことはない、自分たちの結婚を見習うべしとする、臆面もない自己礼賛にすぎないのである。

見逃せないのは、トーマス・マンの言う「同化」が「良きヨーロッパ人に反発を覚えさせるもの一切を典型的ユダヤ人から取り去ること」、つまり「ユダヤ人の脱ユダヤ化」であったことである。その結果、ユダヤ人は二種類に分けられる。つまり、脱ユダヤ化した「同化ユダヤ人」=「優等ユダヤ人」と、脱ユダヤ化しないままの「東方ユダヤ人」=「劣等ユダヤ人」である。かつては「東方ユダヤ人」であったプリングスハイム家も徐々に脱ユダヤ化し、三代目のカーチャの世代にあっては、トーマス・マンも結婚を申し込むことができるほどまでに「同化」していたというわけだ(事実、トーマス・マンはプリングスハイムの双子の兄妹に関して、「この人たちを前にしていると、ユダヤ人だという思いが少しもしない」[65]と兄に書き送っている)。トーマス・マンのこうした「同化」の考え方の根底に、「良きヨーロッパ人」としてのゲルマン人を「優等人種」とし、ユダヤ人を「劣等人種」と見なす人種差別意識が潜んでいることは指摘するまでもないだろう。トーマス・マンは「反ユダヤ主義者」としての顔を慎重に隠しながら、表向き「親ユダヤ主義者」として振舞っている。だが、時として自己制御を失い、「反ユダヤ主義者」の顔を思わず覗かせてしまう。『ヴェルズンゲンの血』や『ユダヤ人問題の解決』、そして『レッシング博士』の場合がそうなのである。

V

さて、トーマス・マンの言う「同化」に真っ向から反対したのがテオドール・レッシングであった。レッシングは『ユダヤ問題の解決不可能性』(1932年)のなかでこう言っている。

> 「同化」への提案はたいていまったく精神的な、主として知的な人たちから出されている。彼ら(たとえばポッパー・リンコイスやコンスタンティン・ブルンナーのような人)は民族性(フォルクストゥーム)の特殊なるものに対するいかなる感覚も持ちあわせておらず、ユダヤ人たちに一つの「民族を超えた使命」を認めておきながら、それ以外の点ではこう要求するのだ。ユダヤ人たちはドイツではドイツ人的に、イギリスではイギリス人的に、トルコではトルコ人的に、中国では中国人的になるべきだ、と。しかしこれは本当のところ、ユダヤ人たちは自己を放棄し、姿を消すべきだということを意味しているにすぎないのである[66]。

レッシングによれば、「同化」とはユダヤ人の「自己放棄」であり、民族としてのユダヤ人の「消滅」にほかならない。なぜなら、「民族性の特殊なるもの」を犠牲にすることによってのみ「同化」は可能となるからである。しかし、「同化」を推奨している知識人たちはこの「民族性の特殊なるもの」に対してあまりにも無頓着である。換言すれば、「同化」によってユダヤ人が失うものを彼らはまったく顧慮していないという。だが、「同化」によってユダヤ人から失われる「民族性の特殊なるもの」とはいったい何か。レッシングは『ユダヤ人の自己憎悪』(1930年)のなかで次のように述べている。

> ユダヤ人がヨーロッパ文化のなかへ入ることによって獲得したもの、そしてヨーロッパがユダヤ人によって獲得したもの、それらは至る所で称讃されるのが常である。しかし、いかなる犠牲を払ってユダヤ人がヨーロッパ市民となったのか、人は見ないし、低い声でしか語らない。ユダヤ人の希望の幻影を裏切ることによって、ユダヤ人の時代を超えた夢を犠牲にすることによって、ユダヤ人はヨーロッパ市民となったのである。今日、この民族(フォルク)はもはや敬虔な賢者たちに導かれているのではない。弁護士たちや大銀行家たちによって組織化されているのである[67]。

言うまでもなく、この「ユダヤ人の希望の幻影」や「ユダヤ人の時代を超えた夢」は、二千五百年来ユダヤ人が信じてきた「メシア信仰」および「メシアによる故郷への帰還」である。そしてこれこそが、ユダヤ人の「民族性の特殊なるもの」にほかならない。とすれば、「同化」を厳然と拒否し、「民族性の特殊なるもの」を声高に主張するレッシングは、まさにファナティックな「ユダヤ民族主義者」にすぎないようにも思える。しかし、そうではない。レッシングを単なる「ユダヤ民族主義者」や「シオニスト」から区別させているのは、「民族性の特殊なるもの」を「人類的使命」として読み替える

そのアクチュアルな解釈であった。すなわち、「ユダヤ人の運命」は「世界のメシア」となることにあるとされ、そこにユダヤ人の尊厳を認めようとするのである。『ユダヤ問題の解決不可能性』のなかでレッシングはこう述べている。

> 困苦(ノート)の試練を受けた被造物の血清によって、すべての脅かされた者たちは困苦から免れることができる。こうした救世主の役割がユダヤ民族に割り当てられたと考えてもらいたい。この役割がユダヤ民族(ユーデントゥーム)の運命とならねばならないし、またなってほしい。ことによるとユダヤ民族は、自身がメシアとなりうるために、メシアを信じてきたし、メシアを生んだのかもしれない。
>
> それゆえ諸民族は学びとってほしい。自分たちが今日ユダヤ人に加えていることが、明日には自分たち自身の運命となるだろうことを。(中略) かつてのユダヤ人のゲットーの運命は、今日、世界の半分を占めるプロレタリアートの定めである。プロレタリアートは至る所でゲットーのなかで暮らしている、自然や風土から切り離されて、動物のように利用され、売られて。「人は二つの民族(ナツィオーン)に同時に所属することはできない」。しかしユダヤ人たちはまさにそれができなければならない。そして明日、明後日の未来の多民族諸国家においてすべての人々は、ユダヤ人だけがその性質から勝ち取ったものを学びとらなければならないだろう。――「人は国際的(インターナショナル)であると同時に民族的(ナショナル)であることはできない」。しかしユダヤ人たちはまさにそれができなければならない。そして明日、明後日の勝利を収める共産主義(コムニスムス)の時代においてすべての人々は、ユダヤ人だけがその性質から勝ち取ったものを学びとらなければならないだろう。
>
> 我々はこの論文において解きがたい諸矛盾の悲劇を論じた。これらの諸矛盾は我々にはユダヤ人の悲劇のように思えた。しかしユダヤ人であることは象徴である。問題は人間の悲劇、あらゆる人間の悲劇なのである。ユダヤ人は最も古い人間以外の何ものでもない。したがってユダヤ人はその血のなかですでに多くの矛盾を解決し、束ねてきたのである。これらの矛盾は比較的若い血のなかでは明日になってはじめて葛藤や病気となることだろう。ユダヤ人は贖罪の山羊である。ユダヤ人はいまや血清を、世界を救済する血を贈る[68]。

共産主義の壮大な実験が烏有に帰したことが明らかになった現在、レッシングのこうした解釈は無効になってしまったであろうか。そうではあるまい。むしろレッシングの解釈はますますアクチュアルなものになっていると言うべきである。なぜなら、グローバリズムの名のもとに地球全体が単一の世界資本主義システムに包摂されている閉塞的事態は、世界が一つの「巨大な近代的ゲットー」[69]に化しているとも見ることができるからだ。そして実際、現代世界は国際主義(インターナショナリズム)と民族主義(ナショナリズム)との葛藤に悩まされ、一部の富裕層と大多数の貧困層との格差はますますひろがり、人口過剰の巨大都市は「自然や風土から切り離されて」文字通り「近代的ゲットー」の観を呈している。近代化の病弊とも言うべきこうした諸問題を解決するうえで、二千五百年以上の昔から諸民族の間で暮らしてきたユダヤ人の酸鼻な経験は「血清」として役立つはずである。レッシングはそこに「現代におけるユダヤ人」の尊厳と価値を認めるのである。

結語

ザムエル・ルブリンスキーは1868年東プロイセンのヨハニスブルクの「同化ユダヤ人」の家に生まれた[70]。彼は古書店の見習いや書籍商として働きながら、独学で膨大な書籍を読破してドイツの権威ある批評家となったのである。この間、1897年から数年のあいだテオドール・ヘルツルの機関誌『世界』(„Die Welt“)の同人となり、シオニストのアジテーターとして活躍した。しかし「文化政策の革新」を主張して、1901年には「同化」政策を支持するに至った。テオドール・レッシングもまた「同化ユダヤ人」の家に生まれたが、1900年にユダヤ人共同体に再入会し、シオニズムへの共感を深めてゆく。決定的であったのは1906年のガリチア地方への旅であり、彼はそこではじめて「賤民(パーリア)」としての「東方ユダヤ人」に出会った。以後、彼は終生シオニストとして生きた。こうしたレッシングから見れば、ルブリンスキーは文学界の「成り上がり者(パルヴェスー)」としての「西方ユダヤ人」以外の何ものでもなく、プリングスハイム家の祖ルドルフ・プリングスハイムのような経済界のそれと何ら選ぶところはなかったのである。しかもルブリンスキーが「成り上がり者ユダヤ人」として近代ドイツ文学を「最後の審判のエホバ」のごとく総括し、裁断するに及んで、その姿勢がレッシングには滑稽に映った。それゆえに、レッシングはルブリンスキーを風刺したのである。そこには、ルブリンスキーを戯画化することで、ヨーロッパに「同化」した「西方ユダヤ人」たちに彼らの祖先の「東方ユダヤ人」を想起せしめる意図があった。トーマス・マンがルブリンスキー擁護のために立ち上がり、レッシングと交わしたはなはだ矮小化された論争の背景には、「同化」と「シオニズム」との対立が、そして「西方ユダヤ人」と「東方ユダヤ人」との対立が潜んでいたのである。

とはいえ、レッシンングはなぜルブリンスキーを実名で風刺したのか。風刺記事『ザムエルは総括する』は一種の反ユダヤ主義的偽態ではなかったか、と私は考える。すなわち、「同化ユダヤ人」の代表としてのルブリンスキーを反ユダヤ主義的表現で風刺することで、「西方ユダヤ人」のみならずドイツの言論界全体を憤激させ、それによって、等閑視されていた「東方ユダヤ人」問題を人々に意識させるという、はなはだトリッキーな戦略だったのではあるまいか。そのためには、是非ともルブリンスキーを実名で風刺する必要があった。匿名であれば、言論界もあれほどの反発を示さなかったろうし、トーマス・マンも敢えて駁論を書くこともなかったであろう。その意味では、レッシングの戦略はまんまと当たったのである。しかし彼の受けた傷も大きかった。彼は晩年にこう述懐している。「私は当時と同様いまでも、あの高慢なグロテスクな風刺を不法ではないし、適切であると思っている。しかしその点で私が間違っていると言うのであれば、そして思い上がった私のからかい癖によって不正を加えたのであれば、ともかくその償いは大いに果たしたのだ。なぜなら、20年間に亘って、今日まで、悪意を抱いた者たちはすべて(そして私はジャーナリスト全体の憎悪にしばしば耐えねばならなかった)繰り返しあの文学的風刺から抜粋したいくつかの文章を発掘しては公然と私を中傷し、その結果、私のイメージはまったく歪められたからである」[71]。

テオドール・レッシングは現在でも、『ユダヤ人の自己憎悪』を著した反ユダヤ主義的ユダヤ人と

して誤解され続けている。だが、彼の先見的思想と活動には、今日の我々にとって貴重な叡智が含まれている。

注ならびに参考文献

注

1) Thomas Mann: An Klaus Mann 1.9.1933. In: Thomas Mann: Essays I 1893-1914 Kommentar, Große kommentierte Frankfurter Ausgabe Bd.14.2, Frankfurt a. M. 2002, S.324.
2) Thomas Mann: Tagebuch 1.9.1933. In: Thomas Mann: Tagebücher 1933-1934, Frankfurt a. M. 1977. S.165.
3) ハンス・マイヤー『取り消された関係』宇京早苗訳、法政大学出版会、2003年、197頁。
4) Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz oder der kleine Profete — Eine Satire. In: Schaubühne, 6., Jg., Nr.3, S.65-73, 20.1.1910.
5) Samuel Lublinski: Die Bilanz der Moderne, Berlin 1904.
6) Ders: Der Ausgang der Moderne, Dresden 1909.
7) Ders: Die Bilanz der Moderne, Tübingen 1974,Vorrede S.V.
8) Ebd., S.370.
9) Ebd., S.224ff.
10) Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz oder der kleine Profete — Eine Satire. In: Schaubühne, 6., Jg., Nr.3, S.65-73, 20.1.1910.
11) Peter de Mendelssohn: Der Zauberer. Das Lenen des deutschen Schriftstellers Thomas Mann. Erster Teil 1875-1918, Frankfurt a.M. 1975, S.825.
12) Thomas Mann: Essays I 1893-1914 Kommentar, S.316.
13) Theodor Lessing: Wider Thomas Mann. In: Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz und Tomi melkt die Moralkuh oder Zweier Könige Sturz, Hannover 1910, S.35.
14) Peter de Mendelssohn: Der Zauberer, S.827.
15) Theodor Lessing: Wider Thomas Mann. In: Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz und Tomi melkt die Moralkuh oder Zweier Könige Sturz, S.35.
16) Ebd.,S.36.
17) Thomas Mann: Der Doktor Lessing. In: Das literarische Echo, 1.3.1910.(12. Jg., H. 11, Sp. 821-824)
18) Thomas Mann: Essays I 1893-1914 Kommentar, S.318.
19) Ebd.
20) Theodor Lessing: Wider Thomas Mann. In: Schaubühne, 10.3.1910.(6. Jg., Nr.10, S.253 -257)
21) Thomas Mann: Berichtigungen. In: Das literarische Echo, 1.4.1910.(12. Jg., H. 13, Sp.977 -980)
22) Theodor Lessing: Berichtigung zur <Antwort> Hernn Manns. In. Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz und Tomi melkt die Moralkuh oder Zweier Könige Sturz, S.48.
23) Theodor Lessing: Antwort an S.Lublinski –Rom. In: Ebd., S.61.
24) Ebd., S.62.
25) Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz und Tomi melkt die Moralkuh oder Zweier Könige Sturz, Hannover 1910,
26) Thomas Mann: Essays I 1893-1914 Kommentar, S.321.
27) Theodor Lessing: Samuel Lublinski. Gedenkworte.1910. In: Theodor Lessing: Philosophie als Tat,

Göttingen 1914, S.343-352

28) Thomas Mann: An Heinrich Mann.26.1.1911. In: Thomas Mann: Briefe I 1889-1913, Große kommentierte Frankfurter Ausgabe Bd.21, Frankfurt a.M. 2002, S.473.

29) Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz oder der kleine Profete — Eine Satire.In: Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz und Tomi melkt die Moralkuh oder Zweier Könige Sturz, S.17 f.

30) Ebd., S.21 f.
なお、リヒアルト・ムーター Richard Muther はドイツの美術史家。

31) Ebd., S.22 f.

32) Ebd., S.23.

33) Ebd., S.22.

34) Ebd.

35) Ebd., S.23.

36) Ebd., S.24.
なお、『イェルン・ウール *Jörn Uhl*』はグスタフ・フレンセン Gustav Frenssen の1901年発表の小説。リヒアルト・シャウカール Richard Schaukal はオーストリアの詩人。

37) Ebd., S.25.

38) Ebd., S.27.

39) Theodor Lessing: Erzieher zum Geiste oder Lichtstrahlen aus den Weken deutscher <Ehrenrichter>. (Einige Proben) . In: Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz und Tomi melkt die Moralkuh oder Zweier Könige Sturz., S.70.

40) Ebd., S.68.

41) Ebd., S.65 f.

42) Peter de Mendelssohn: Der Zauberer, S.828.

43) Thomas Mann: Der Doktor Lessing. In: Thomas Mann: Essays I 1893-1914, Große kommentierte Frankfurter Ausgabe Bd.14.1, Frankfurt a. M. 2002, S.218.

44) Ebd.

45) Ebd.

46) Ebd.,S.219.

47) Theodor Lessing: Wider Thomas Mann. In: Theodor Lessing: Samuel zieht die Bilanz und Tomi melkt die Moralkuh oder Zweier Könige Sturz., S.40.

48) Ebd., S.40 f.

49) Ebd., S.42.

50) Ebd., S.40.

51) クラウス・ハープレヒト『トーマス・マン物語 I ——少年時代からノーベル文学賞まで』岡田浩平訳、三元社、2005年、95頁。

52) 同上。

53) Thomas Mann: Der Doktor Lessing. In: Thomas Mann: Essays I 1893-1914, S.222 f.

54) Hermann Kurzke: Thomas Mann —— Das Leben als Kunstwerk, Frankfurt a.M. 2005, S.226.

55) Thomas Mann: Der Doktor Lessing. In: Thomas Mann: Essays I 1893-1914, S.222.

56) Ebd.

57) Ebd.

58) Katia Mann: Meine ungeschriebenen Memoiren, Frankfurt a.M. 2004, S.82.

59) Hermann Kurzke: Thomas Mann —— Das Leben als Kunstwerk, S.227.

60) クラウス・ハープレヒト、前掲書、232頁。

61) 同上。
62) 同上、238頁。
63) Thomas Mann: Die Lösung der Judenfrage. In: Thomas Mann: Essays I 1893-1914, S.176.
64) Ebd., S.177.
65) Thomas Mann: An Heinrich Mann 27.2.1904. In: Thomas Mann: Briefe I 1889-1913, S.271.
66) Theodor Lessing: Die Unlösbarkeit der Judenfrage(1932). In: Theodor Lessing Ausgewählte Schriften - Bd.2, Bremen 1997, S.141.
なお、ポッパー・リンコイス Popper-Lynkeus はオーストリアのユダヤ系社会哲学者、発明家、作家。コンスタンティン・ブルンナー Constantin Brunner はドイツのユダヤ系哲学者、作家、文学批評家。
67) Theodor Lessing: Jüdischer Selbsthaß, Berlin 1930, S.26.
68) Theodor Lessing: Die Unlösbarkeit der Judenfrage(1932). In: Theodor Lessing Ausgewählte Schriften - Bd.2, S.148 f.
69) Theodor Lessing: Jüdischer Selbsthaß, S.217.
70) Vgl. Lublinski,Samuel.In:Deutsche Biographie. http://www.deutsche-biographie.de/sfz54521.html (08.10.2013)
71) Theodor Lessing: Einmal und nie wieder, Prag 1935, S.320.

参考文献

Hans Wysling: 《Ein Elender》. Zu einem Novellenplan Thomas Manns. In: Thomas-Mann -Studien. Erster Band. Quellenkritische Studien zum Werk Thomas Manns., Frankfurt a.M. 2008

Yahya Elsaghe: Judentum und Schrift bei Thomas Mann. In: Thomas-Mann -Studien. Dreissigster Band. Thomas Mann und das Judentum., Frankfurt a.M. 2004.

Thomas Klugheit: Thomas Mann und das Judentum. In: Thomas-Mann -Studien. Dreissigster Band. Thomas Mann und das Judentum.,

Elke-Vera-Kotowski: „Ich warf eine einsame Flaschenpost in das unermessliche Dunkel". Theodor Lessing 1872-1933, Hildesheim 2008.

Ders: „Sinngebung des Sinnlosen". Zum Leben und Werk des Kulturkritikers Theodor Lessing (1872-1933), Hildesheim 2006.

Ders: Feindliche Dioskuren. Theodor Lessing und Ludwig Klages. Das Scheitern einer Jugendfreundschft(1885-1899), Berlin 2000.

Ders: Theodor Lessing(1872-1933), Berin 2009.

Rainer Marwedel: Theodor Lessing, Darmstadt 1987.

Jochen Hartwig: „Sei was immer du bist". Theodor Lessings wendungsvolle Identitätsbildung als Deutscher und Jude, Oldenburg 1999.

Maja 1. Siegrist: Theodor Lessing. Die entropische Philosophie, Bern 1995.

Hans Eggert Schröder: Theodor Lessings autobiographische Schriften. Ein Kommentar, Bonn 1970.

Sander L.Gilman: Jüdischer Selbsthaß. Antisemitismus und die verborgene Sprache der Juden, Frankfurt a.M. 1993.